

編集室

* 編集特別幹事を拝命して既に1年余がたち、その間、何とか無事に本学会誌の編集に携わってきたが、そもそも私のような企業の研究者にとって、このような学会活動の持つ意味を考えてみた。

* 学会における各種委員などの活動は、学会からの委員委嘱を所属する組織によって認められた上で行っているわけではあるが、所属組織（私の場合、企業）の本来活動への直接的なフィードバックは期待できない。少々、口の悪い御仁には、単にボランティアにすぎないと断言される場合すらあった。ただ、企業の研究所にいても研究者の端くれである私としては、生きているあかしのよう活動である。私を育ててくれた学術分野への恩返しでもあり、自己実現のプロセスなのかもしれない。

* 何よりも、同じ学術分野に知的好奇心を持つ人たちが集まりコミュニティを形成し、そのコミュニティの維持・発展といった目的の達成のために（本来なら、所属組織間では利害関係があるかもしれないが、この際それを忘れて）協働することの楽しみは、否定できない。このような活動を所属組織に認められて行えること自体が、幸せなことなのだろう。

* さてそれでは、学会活動の中における学会誌の編集については、どうであろうか。世の中の技術動向を見極め、大学を含む様々な組織に属している異なる背景を持つ編集委員の方々と議論して記事などを集め、また学会の事務局の方々と編集作業を進めていくことについては、多々行き詰まる場面など厳しい部分がある反面、やり遂げたときにはその醍醐味さえ感じることがある。

* 自分の専門分野にとらわれていては、読者である会員に広く興味を持って頂ける学会誌を編集することはできないわけで、なるべく広く学術分野を見渡したいという行動もおのずと身に付く。特集号を編集する際には、それが掲載される学会誌の発行の約1年前から検討が始まる。特に技術的進展の激しい本学会のかかわる分野では、したがって、先を見据えた検討がどうしても必要となっている。

* 一つの記事の執筆を任されていたときには気が付かなかったことではあるが、編集に携わってみると、他の記事とのバランス（同じ号だけではなく、号をまたいで）が気になることもある。逆に言うと、うまくすれば号をまたいで企画することで、効果的な情報伝達の訴求も可能かと思う。

* 記事の執筆依頼などを通して、今までの研究活動では知り得なかった分野の著名な先生方とお知り合いになれるのも魅力である。編集担当者としての突然の不躰なお願いに対して、多忙にもかかわらず真摯に対応して下さいるので、まことに有り難い限りである。

* Wikipediaによれば、編集の元の用字は「編輯」であり、この「輯」は車輪の中心にスポークが集まって車輪を成す様子を表しているとのことである。多彩な情報をいろいろな情報源から集め、編み上げて作品を作り上げる感覚であろうか。私も今の学会誌の編集活動を通して、やっとこの感覚がつかめてきた。毎号の発行部数が三万冊を超える本学会誌の向こうには、大勢の会員の方々がいる。その知的好奇心を満足させる学会誌を作り上げていくことができれば、それはやはり大きな喜びに違いない。

（編集特別幹事 荒川賢一）